

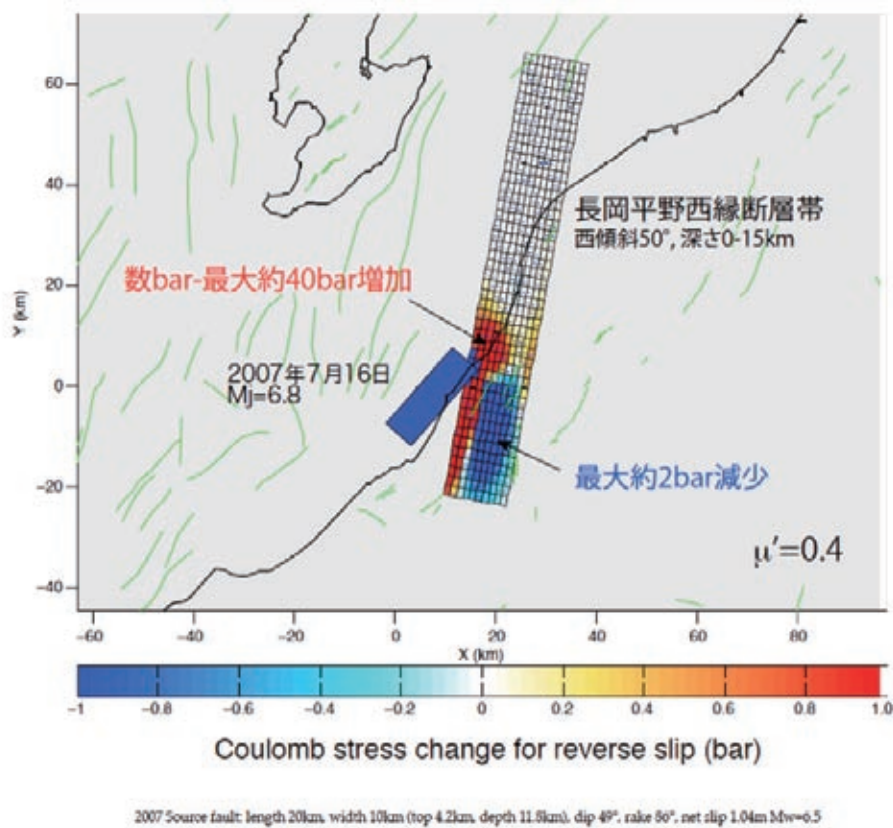
7 - 21 2007 中越沖地震によって長岡平野西縁断層帯にかかるクーロン応力変化 Static Coulomb stress change on the Nagaoka-heiya-seien fault zone caused by the 2007 Chuetsu-oki earthquake

産業技術総合研究所

Geological Survey of Japan, AIST

震源断層モデルと長岡平野西縁断層帯の位置や傾斜，地下構造，有効摩擦係数等により値は変わりうる．しかし，いずれにしても，長岡平野断層帯南部の地下深部ではきわめて大きな応力変化が予想される．これまでのストレストリガリングの研究では，応力増加域で地震活動が活発化し，次の大地震の震源（破壊開始点）になることが多い．そのため，断層帯全体の平均値ではなく，最大値付近を重要視し，今後の評価につなげるべきだと考えられる．今後は応力増加域での余震活動を注意深く観測する必要があると思われる．また，1828年三条地震（M6.9）のような断層帯の一部の活動も考慮した確率評価を検討すべきであろう．

（遠田晋次）



第1図 2007年中越沖地震によって長岡平野断層帯のかかるクーロン応力変化．

Fig. 1 Coulomb failure stress change resolved on the inferred subsurface fault of the Nagaoka-heya-seien fault zone due to the Chuetsu-oki earthquake.